

キリマンジャロ

田中晶子

出発を一日すっぱかされたり、カメラを預けた修理屋が受け取る前に閉店してしまったり、トラブル続きでしたが、何とか無事ケニアからタンザニアへのナマンガゲートを通りました。UTC（東アフリカだけ200以上のツアーを持っている）の車からタンザニアの車に乗り替えて走り始めると、心底大陸を実感しました。9年前の南北アメリカ縦断は環太平洋造山帯でした。ケニア北部はアフリカ大地溝を駱駝に揺られる移動速度でした。こゝは走れども走れども耕した跡がなく、蟻塚のみニョキニョキ。駝鳥が遠くを走ったり、キリンが近くを走ったり、こうのとりの一種が、一瞬フロントガラスを覆わんばかりに道路を横切ったり。稀に赤布一枚身にまとうマサイが山羊の群を追っているだけです。

キリマンジャロに近づくと谷に水が流れ、バナナが茂り、その下にコーヒーの若木が植えられていました。麓に一泊した登山の第一日は、一行7名（フェアバンクスのリー小父さん61才、プレトリアの足長氏48、ロスアンジェルス鼻長氏・フェニックスのまんじゅう氏38、シドニーのライオン丸33と私共母娘—大学教授のリー氏以外はニックネームで、年齢は登山者名簿から、なお南アの足長氏は住所はワシントンDCのどこかを書いてあった）とガイド4名、ポーター5名の食糧調達に始まります。大まさかりで、牛の頭蓋骨を打ち砕いています。我らが御馳走スープの素です。再び車で登山口へ、所が登山科はドルで支払わねばならず、私のそれはホテルのトランク。誰も貸してあげるとは云ってくれないので、車で往復30分、疲れしました。こういう“ドジ”はいつも私の旅につきまといま

す。マラングハットに寝袋を伸ばしてから、マウンディクレータまで雨の中散歩に出かけました。ぬかるむ道の両側はサルオガセがびっしり。稜線に出たけれど霧が濃くて何も見えません。“もう引返そう”、“もうちょっと”娘の姿はたちまち霧の中、佇むこと10分、ノーブーと呼ぶと、反対側から返事、彼女は火口壁を廻ってきたのでした。

雨林が灌木に変わる辺が燃料の調達地らしく、黄色の花をつけた^{ヒバ}松葉みたいなのが、赤い切り口を見せています。ポーターはこれを頭にのせて運びます。サファリの車さえガス欠で止まる事があるというこの国では山小屋の燃料は木なのです。この切り口に草が生えて枯れてが繰り返されて、その上に茎が伸びて大きいオレンジ色の花が咲いています。チェネチアンと教わりました。

雲の上に出ると視界は開け、下界からは見えなかった雪のキボ峯と岩峯のマウエンジ峯が姿を現します。ウキウキとして食欲の落ちている事を気かけませんでした。植生が消え砂漠状の所を進むうち、最高地点の山小屋キボハット(4,635m)が見えました。とたんに足が前に出ないのです。へトへト辿り着き、チョコレート水を水で飲み下しましたが…。チーフガイドのデイブは“頭痛がないなら一番軽い症状だから大丈夫”と励ましてくれるのですが、なにしろ大人になって以来病気で休んだことのない私ですから、水さえ受けつけない胃袋を重症と思ひ込みました。真夜中一時の出発直前にまたまた…。^{こめかみ}顛顛と胃袋がドクンドクン脈打って、頂上は熱い涙で諦めました。みんなが出かけてもう一度とび出すと、満天の星空でした。気分がよくなり、その次には雲海と日の出を一人占めました。頂は娘達三人が踏みました。

下山を始めて振り返ると、丁度涸沢から奥穂という感じで弱気が侮られます。下山中ポーターのアランと話しました。祖父母入れ9人家族。父なく男の最年長なので16才の自分が一家を養っている。ポーターの収入があるとモンバサまで、買物に行く。日曜にはルーテル派の教会に行く、等。

下山一泊のホロンボハット手前から雨、翌日も雨、ぬかるむ道を登る人は途切れません。大変な外貨獲得源!!更に下ると、草刈鎌を手にした五・六才の子供達がピービー（キャンデー）とせがみます。瞳が黒々と真剣です。写真を撮って行こうとすると追いつがります。“ごめん何も持ってない”と日本語で詫びたら、泥んこの軍手でいゝ、と助かりました。（8回生）